

大学院生によるアメリカの小中学校における 体験型海外教育実地研究報告Ⅶ

小原友行・深澤清治・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三
松尾砂織・河合彩華*・明道春奈*・黒川麻実*・横山 愛*・天野航平*
池田大徳*・酒井麻未*・岡田光未*・坂本 亮*・吉川修史*・常安智也*
藤井 瞳*・永杉茂仁*・加納大地*・若原崇史*

(2013年12月6日受理)

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students in Elementary/Secondary Schools in the United States (VII)

Tomoyuki KOBARA, Seiji FUKAZAWA, Atsushi ASAKURA, Taketo MATSUURA, Nagako MATSUMIYA, Atsumi UEDA, Saori MATSUO, Ayaka KAWAI, Haruna MYODO, Mami KUROKAWA, Ai YOKOYAMA, Kohei AMANO, Hironori IKEDA, Asami SAKAI, Mitsumi OKADA, Ryo SAKAMOTO, Shuji KIKKAWA, Tomoya TSUNEYASU, Hitomi FUJII, Shigehito NAGASUGI, Daichi KANO and Takashi WAKAHARA

Abstract. The present reports is on the 7th overseas teaching practicum in the United States by 15 graduate students of Hiroshima University, Japan, partly organized by Hiroshima University Global Partnership School Center since 2007. The group was comprised of 13 elementary school and 2 secondary school education major graduate students. They planned and conducted lessons in English in three local public schools in North Carolina. The expected outcomes of this project were: 1) to self-develop practical instructional competence by teaching pupils with diverse backgrounds in the U.S.; 2) to enhance the abilities in developing teaching materials through hands-on teaching experiences in English; and 3) to acquire the abilities to design, implement and evaluate programs for promoting global partnership. In addition, the teaching experience was followed by cross-cultural study visits to Raleigh, NC and Washington, D.C. It helped to boost our group motivation that the local media, newspaper and TV, and the city Board of Education covered our visit. It is hoped that this project will enhance the students' teaching competence in designing quality materials/lessons and classroom communication skills in English.

1 はじめに

「体験型海外教育実地研究」は、広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター（略称はGPSC）が開発し企画・実施しているプログラム（2009年度からは教職高度化プログラムの選択科目）であるが、本年度は第7回目の実施となる。本年度は、これまでで最高の博士課程前期1年の大学院生15名（初等13名、中等2名）が参加して実施された。

この授業科目に期待される成果・効果は、次の3点である。

① 言語に頼らない授業実践が求められるため、米国の児童・生徒理解に基づく教材や指導方法の開発

工夫を行う実践的指導力を自ら形成できること。

② 日本文化に関する教材を開発し、それを米国ノースカロライナ州の公立小・中学校において英語で授業を行うという実体験や、現地での多様な学校や優れた教師による授業の見学を通して、文化の相互理解を図るための教材開発の力量が形成できること。

③ グローバル・パートナーシップを推進するために必要なプログラムの開発・企画・実施・評価を行う力量が形成できること。

授業は前期の集中科目の位置づけであるが、実際は年間を通したプログラムとなっている。具体的には、本年度は、4～8月の事前の教材研究、9月14日～23日の米国ノースカロライナ州グリーンビル市内の公

*広島大学大学院教育学研究科博士課程前期大学院生

立小・中学校（ウォールコート小学校、エルムファースト小学校、C.M.エッペス中学校）での教育実習とイースタカロライナ大学での大学院生との授業の中での交流、州都ローリー市内のイクスプローリス中学校での教員との意見交換や授業見学と博物館を中心とした教材調査、首都ワシントンDCでの多文化理解学習のための教材調査、そして帰国後の10～11月の事後研究による教材の完成とレポート作成となっている。

なお、本年度も、7月6日に開催された「アクションリサーチを取り入れた教員養成の挑戦」をテーマとした第9回の学校間交流国際フォーラムのために来日してもらった、実習校であるウォールコート小学校の2名の教員とイクスプローリス中学校のサマー・クレイトン校長、そしてGPSCのパートナー校であるイースタカロライナ大学教育学部のサンドラ・ウォーレン先生の4名の協力を得て7月7日に行ったワークショップにおいて、事前の指導案検討を綿密に行った。そのこともあり、現地での授業実践が児童・生徒の想像力・創造力を引き出す質の高いものとなり、地元の新聞社や教育委員会の取材を受けるなど、大きな成果をあげることができた。以下では、本年度の現地研究の概要、参加者の報告、評価について紹介していきたい。

2 2013年度「体験型海外教育実地研究」の概要

(1) 全体日程

2013年度、本授業科目の実施状況（全体日程）は以下のとおりであった。

- 4月5日（金）2013年度「体験型海外教育実地研究」実施説明会
- 4月24日（水）本授業の概要と計画説明
- 5月15日（水）授業研究テーマ案の発表
- 6月6日（木）学習指導案の検討(1)
- 6月11日（月）学習指導案の検討(2)
- 6月24日（月）学習指導案（英語版）の検討(1)
- 7月1日（月）学習指導案（英語版）の検討(2)
- 7月6日（土）第9回学校間交流国際フォーラム参加
- 7月7日（日）2013年度「体験型海外教育実地研究」授業研究ワークショップ参加
- 8月26日（月）学習指導案・教材・教具の検討および渡航のための諸手続き
- 9月9日（月）渡航前最終打合せ
- 9月14日（土）～9月23日（月）
米国における「体験型海外教育実地研究」

12月12日（木）「体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

(2) 現地での日程

- 9月14日（土）広島出発、米国ノースカロライナ州グリーンビル到着
- 9月15日（日）授業準備および授業打合せ
- 9月16日（月）グリーンビル現地学校訪問（観察、一部実習）
- 9月17日（火）グリーンビル現地学校訪問（実習）
- 9月18日（水）イースタカロライナ大学の授業参加、グリーンビルからローリーへ移動
- 9月19日（木）イクスプローリス中学校訪問
- 9月20日（金）ローリーからワシントンへ移動
- 9月21日（土）ワシントン研修
- 9月22日（日）ワシントン出発、機内泊
- 9月23日（月）広島到着

(3) 参加者およびグリーンビルにおける配置

本年度の「体験型海外教育実地研究」には、前述のとおり大学院生15名が参加した。なお、参加大学院生の渡航費用や滞在費はすべて自己負担となっている。

参加学生の現地での学校配置、担当者、参加者、引率教員は以下のとおりである。参加者は事前に準備した授業を各校において実施した。

【エルムファースト小学校（K-5）】

実施校担当者：ワンダ・ウィリアムズ先生

参加者：河合彩華・天野航平・吉川修史・永杉茂仁・若原崇史

引率者：小原友行

【ウォールコート小学校（K-5）】

実施校担当者：シンディー・ワトソン先生

参加者：明道春奈・池田大徳・酒井麻未・坂本 亮・常安智也

引率者：植田敦三・松浦武人

【C.M.エッペス中学校（6-8）】

実施校担当者：ウィリアム・フラー先生

参加者：黒川麻実・横山 愛・岡田光未・藤井 瞳・加納大地

引率者：深澤清治・松尾砂織

3 参加者の報告

参加者（15名）は、各校において実践した授業に関する「ねらい」、「概要」、「成果と課題」および授業の準備から実践を通じた「自己変容」について報告を作成した。次頁以降にこの報告を掲載する。

幼稚園 異文化理解 “A wish in TANABATA”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 常安 智也

1 ねらい

本授業のねらいは、日本の行事である七夕を知り、短冊に願いを書き、笹に結びつけるという異文化体験と、アメリカと日本の子どもたちの願いを交流し、其中でお互いの願いを尊重しあい、その願いの良さや優しさに気付くことができるようにすることである。

2 概要

- (1) 自己紹介をし、日本にはたくさんの文化があることを伝え、その一つの七夕を紹介し、興味を引き付けた。
- (2) 七夕にまつわる織姫と彦星の話をする時、子どもたちは真剣にスライドを見ていた。七夕でなぜ願いが叶うのかその意味を伝えた。
- (3) 短冊に願いを書くと子どもたちはすぐに書き始めた。字を習っていないので、絵で描いていた。
- (4) 自分たちが描いた願いについて、クラスで共有した。兵士になりたい、医者になりたい、子犬が欲しい、スポンジポップがほしい、滑り台で遊びたい、ブランコで遊びたい、人形が欲しい、などの夢を語ってくれた。
- (5) 日本の子どもたちの願いを伝えるために、スライドで子どもたちの願いを見せた。
- (6) 夢で似ているところ、違うところを尋ねた。子どもたちは「私も日本の子どもの気持ちすごくわかる。病気のおばあちゃんがいたら私も早く治ってほしいと思う。」と優しいことを述べてくれた子がいた。
- (7) 最後に学習のまとめとして、短冊にこよりを通し、テープで笹につけさせた。マクスウェル先生と、アダムス先生が配るのを手伝ってくださり、短冊のついた笹を作ることができた。



3 成果と課題

- 七夕の活動に子どもたちはみな真剣に取り組み、願い事の発表も自ら進んで手を挙げており、笹に結び付ける活動まで興味津々に行っていた。
- 日本の伝統行事である七夕についてその願いが叶う理由を理解できた。
- 日本の子どもたちの願いを見て、「私も病気のおばあちゃんがいたら早く治ってほしいと思う！」と日本の子どもたちの願いに共感する意見を持つ子がいた。
- 自分の願いと日本の子どもの願いを比較する視点を明確にしていなかった。
- なぜ、教師が日本の子どもたちの願いを英訳して提示したのか、その意図を提示しなかったため、その願いの良さ・優しさを深く理解することができていなかった。
- 自分の語彙力不足から、子どもの意見を理解し授業に十分に生かすことができなかった。

【自己の変容】

幼稚園児を対象とした英語での授業であり、工夫をするところがたいへんあった。いかに日本の七夕に興味を持ってもらうか、どのような英語を用いるか、そして活動の流れ、教材の見せ方など、日本語で授業を作るより何倍もの時間をかけて吟味した。授業を創造していく中で、授業計画は簡潔明瞭に、教材はわかりやすく発達段階に適したものをつくることなどの大切さを痛感することができた。

第2学年 音楽科 “Let’s sing WARABEUTA together!”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 明道春奈

1 ねらい

本授業では、教材曲として《あんたがたどこさ》を取り上げ、歌詞に多用されている「さ」とそれ以外の部分の動きを考える活動を設定した。全身を使いながらわらべうた遊びをし、自分で動きをつくる活動を通して、日本のわらべうたを身体で感じて理解すること、自分なりに動きを工夫しながらつくることをねらいとしている。

2 概要

- (1) ウォーミングアップの後、《あんたがたどこさ》の歌詞と意味を読みながら確認し、教師の伴奏に合わせて歌った。その次に、導入曲の“If you’re happy and you know it, clap your hand”と《あんたがたどこさ》の共通点と相違点を探し、身体を動かしたり歌ったりしながら理解した。
- (2) いろいろな《あんたがたどこさ》の遊びをした。歌詞の「さ」の部分で手をたたき、ジャンプする、身体の一部（頭や肩など）を触る遊び、ペアで手合わせをする遊びを、教師の伴奏に合わせておこなった。
- (3) オリジナルの《あんたがたどこさ》の身体の動きを子どもたちが自由に考えた。子どもたちは、実際に歌いながらいろいろな動きを試していた。人数を指定しなかったため、1人で考える子ども、近くにいる友達と一緒に考える子どもがいた。机間を周りながら、動きを考えにくい子どもには、一緒に考えながら遊んだり(2)でおこなった身体の動きを使ってもいいよ声をかけたりした。
- (4) 全員で、教師の伴奏に合わせて、歌いながらそれぞれつくった動きをして遊んだ。最後に、歌詞や意味、今回おこなった遊びなどを絵などで示したプリントを配った。

3 成果と課題

【成果】

- ・教材曲と活動内容の難易度が適切に設定できたため、子どもたち1人ひとりの多様な表現を引き出すことができたこと。
- ・日本とアメリカで同じような授業を行うことができたため、子どもたちの表現について比較検討することができ、環境が表現に与える影響性や、文化の相違性を見いだせたこと。

【課題】

- ・時間配分のミスもあり、日本の子どもたちが考えた動きの映像を見せることができなかったこと。実際に日本の子どもたちが遊んでいる様子や、つくったものの映像を見ることによって、異文化理解の機会となり、また、子どもたちの表現に広がり生まれたかもしれない。

【自己の変容】

今回の授業づくりにおいては、「子どもたちには言葉や意思が通じないだろう」という発想からスタートし、授業づくりをおこなった。そして、視覚や聴覚といった五感に効果的に作用する教材・教具を用いること、分かりやすく明快な言葉で指示や質問をすること、ボディーランゲージやアイコンタクトを大切にすることなどの重要性を痛感しつつ、実際にそれらを大切にしながら授業実践することができた。この授業づくりの発想が、今までに足りなかったと感じている。

そして、今まで漠然としたイメージしかなかった国際交流や異文化理解だが、本研修を通して、良い意味で「なんてことなかった」と感じるすることができた。これまで、国際交流や異文化理解に対して、「自分には難しいもの、縁の遠いもの」と自分でハードルを上げてイメージしていただけだったのである。“Think global, act local.”の通り、自分のできることから行動に移し、それを継続していきたい。

第2学年 異文化理解 “Let’s make a decoration of the Halloween with origami!”

教育学研究科 科学文化教育学専攻 社会認識教育学専修 若原 崇史

1 ねらい

本授業のねらいは次の2点である。1点目は、日本の伝統的な遊びである折り紙を実際に体験させることを通して、日本文化に興味を持たせることである。さらに2点目は、自分たちが作った作品を見せ合うことでお互い表現の仕方、感じ方の違いに気づくことである。

2 概要

- (1) まず、折り紙で作ったアルファベットを用いて自己紹介を行い、今回の授業のテーマが折り紙であることを伝えた。
- (2) 次に、日本人が年中行事を折り紙で作ったデコレーションを用いて飾ることを説明した。その後、ハロウィーンのデコレーションを作る活動を行うことを伝えた。
- (3) そして、折る手順を示した説明書と少し大きめの折り紙を配布した。なお、各々が先の手順に進まないように注意した。
- (4) 進度をそろえ順に折っていった。
- (5) 折り終えたあと、マジックでそれぞれに顔を描かせ、ジャックオーランタンを完成させた。予定の時間を越えてしまったため、それぞれ手に持って見せ合うことで授業を終えた。



3 成果と課題

本授業の成果は3点挙げられる。1点目は、子どもたちが積極的に折り紙に取り組み、出来上がった作品を見て達成感を感じていたことである。2点目は、折り方を理解した子どもがわからず困っている近くの子どもに教える場面がみられたことである。教え合いを促すこともあったが、自発的な教え合いも見られた。3点目は、アメリカの教師ほどはできなかったが、子どもたちの言動に「good!」のように反応ができたことである。

課題は2点挙げられる。1点目は、折ることに時間がかかってしまったことである。自己紹介などを簡潔に済ませ活動のために30分用意できたのだが、実際には折り紙を折るだけで終わってしまった。2点目は、1点目に大きく関わってくるのだが準備が十分ではなかったことである。子どもたちが躓くと予想される手立て・説明の言葉が用意できていなかった。言葉、手本だけでなく、アニメーションなどの視覚的に説明する方法を用意しておけば、授業時間も越えることはなかったように思う。

【自己の変容】

今回の授業で感じたことは、事前の準備の重要さである。今回アメリカで初めての授業であるため、子どもたちがどの程度折り紙が折れて、どの程度躓くかということを予想するのが困難ではあった。しかし、それにしても躓くであろう過程への手立てが欠けていたように思う。このような手立てが必要なのはアメリカに限ったことではない。日本でも同様である。アメリカで授業することで改めて授業準備の重要性を感じさせられた。

第3学年異文化理解 “Let’s play the Japanese ‘MENKO’ game.”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 坂本 亮

1 ねらい

本授業のねらいは3点であった。1点目は日本の伝統的な遊びであるメンコ遊びを実際に体験することによって、異文化を体験することである。2点目はメンコ遊びを通してクラスの仲間と交流することである。3点目は、遊びながら自然と体力が向上するような環境を体験することである。

2 概要

- (1) 自己紹介の後、メジャーリーガーに関するクイズを行った。
- (2) メンコ遊びを、野球のピッチャーの様な動きをする日本の遊びとして紹介した。
- (3) メンコ遊びのルールを伝え、2人1組のペアを作って実際にメンコ遊びを行った。
- (4) 最後に、メンコ遊びが遊んでいるうちに自然と体が鍛えられる遊びであることを伝え、似たようなシンプルな素材で体を使って遊べる遊びが無いか、探してみるように伝えた。



3 成果と課題

成果としては、日本の伝統的な遊びを実際に体験させることができたので、心に残る異文化理解ができたのではないかと考える。また、ルールを絵と簡単な英単語で表したことによって、ルール説明の時間がスムーズに進み、十分な活動時間が確保できたことも、異文化を体験し理解することに寄与できたと考える。

課題としては、まず自らの英語力の低さである。英語力の低さによって、子どもとのコミュニケーションが上手く取れなかったり、授業中の余裕が無かったり、授業で伝えたかったことが上手く伝わらなかったりと、授業の基礎的な部分が築けなかったことが最大の課題である。また、子どもたちの関心事の中心が日本文化の理解にあったため、似たような遊びを探そうという意欲を持たせることができなかったことも課題として残った。子どもの興味・関心を見抜いたり、興味・関心を方向付ける様な工夫や手立てを考えたりすることがもっと必要だったと考える。

【自己の変容】

私は本授業を通して、指導者が伝えたいことと学習者が学びたいことの間にはズレがあり、またそのズレを小さくしたり、学習者にズレだと感じさせないようにしたりすることが大切だと感じるようになった。本授業では自分の英語力の低さから、このズレを感じ取ることも修正することもできなかった。しかしながら、日本における授業であれば、このズレを感じ取ったり修正したりすることも少しは容易になると考えられる。本授業で気付くことのできた課題やズレへの気付きを、今後の自分の成長や教育活動の充実に役立てられるようにしたいと強く思った。

第4学年 異文化理解 “Let’s hold “Yuru-chara” contest in Greenville!”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 天 野 航 平

1 ねらい

日本の文化である「ゆるキャラ」と、そのブームの背景にある人々の郷土への想いについて知る。また、グリーンビルのゆるキャラを考える中で自分の町について見直し、郷土への想いを深める。

2 概 要

- (1) 導入には、人気キャラクターの画像を見せながら、キャラクターには様々な種類があることを説明した。その上で、ゆるキャラと呼ばれるキャラクターが現在日本で人気であるということを紹介した。
- (2) ゆるキャラを10種類ほど紹介し、子ども達に気に入ったものを答えてもらった。その後、ゆるキャラ達の持つ共通点を予想して答えてもらった。ヒントとして日本地図上にゆるキャラを配置して見せ、日本の様々な町のキャラクターであることに気付けるようにした。
- (3) 今治市のゆるキャラ「バリイさん」を提示し、特徴についての気付きを尋ねた。その後スライドショーを用いて、今治市の様々な要素が名前やデザインの由来となっており、今治の良い所がたくさん詰まったキャラクターであることを説明した。
- (4) ゆるキャラの様々な活動の写真を示し、ゆるキャラが地域振興や地域間交流、復興の中心となっている様子を紹介し、ゆるキャラブームの根底には人々の郷土愛があることに気付けるようにした。
- (5) ワークシートを配り、グリーンビルのゆるキャラを考えるという活動を行った。まず、観光、自然、食べ物など、例を示しながら、「自分の町の良い所、好きな所は何か」という発問を行った。多くの子どもが、自分なりにグリーンビルの良い所について考え、積極的に活動に取り組んでいた。スポーツチームや食べ物、動物等を挙げ、それを基に様々なキャラクターを自由に考えている様子が見られた。最後に、一人ひとりがグリーンビルについて考え、沢山の良い所を出すせたことを評価し、まとめとした。

3 成果と課題

今回、パワーポイントを主に使用しながら授業を行った。これにより、視覚情報も使いより具体的に説明することができ、ゆるキャラという日本文化について理解してもらうことができたと考える。その反面、特に授業の前半は提示や説明がメインとなってしまう、子どもが考えたり活動したりという時間が少なかった。また、子どもから出た質問や、発問に対する発言があまり聞き取れず、充分にコミュニケーションをとることができなかった。その結果、一方通行型の授業になってしまったように思う。

ゆるキャラを作成する活動では、一人ひとりが自分なりにグリーンビルの良い所について考えることができていた。「一般的に言われる」良い所だけではなく、「自分の思う」良い所を沢山あげることができていた。その点で、この授業を通して、本実践のキーであった「自分の郷土に対する想い」に迫ることができたのではないかと考える。それを基に発表や交流を行い、子どもたち同士で想いを共有していくことができれば、更に深めることができたのではないかと考える。説明によってゆるキャラを理解してもらう場面も重要ではあったのだが、子ども自身が考え、意見交流していく場面にもっと重点を置いて授業構成していく必要があったと考える。

【自己の変容】

今回の授業実践で、言葉が通じないのは日本人相手であれば何となく理解してくれること、当たり前に行っていることが、アメリカの子ども相手には通じないという場面が何度かあった。自分がこれまで日本語が通じること、相手がなんとなく理解してくれることに依存していたことに気付くことができた。これから日本の子ども達と関わっていく際にも、その当たり前に甘えず、どうしたら伝えられるのか、どうすれば理解してもらえるのか、世界中の誰にでも伝えられるように、という視点をもって考えていきたい。

第4学年 異文化理解 “Names of Traditional Colors ~My color, Our colors”

教育学研究科 学習科学専攻 学習開発基礎専修 酒 井 麻 未

1 ねらい

日本には古来より数多くの伝統色や重ね色目が伝わっており、また同様にアメリカにも伝統色が存在する。それらの色それぞれに、国の文化を色濃く反映した名前がついていることから、伝統色に触れることでそれぞれの国独自、またその時代独自の感じ方を味わうことができると考えた。よって本授業のねらいは、①日本やアメリカに伝わる伝統色を通しそれぞれの国の美意識や文化の特徴を感じ取ること、②自分たちなりの色の名前をつける活動を通しお互いの表現を尊重し合うことの二点とした。

2 概 要

- (1) 自己紹介を行った後、日本の着物について紹介した。実際に持参した浴衣の色が何色かを問い、展開につなげた。
- (2) 日本の伝統色を紹介し、「桜色」「萌黄色」「曙色」を例示した。
- (3) アメリカの伝統色を確認し、「リンカーンレッド」「カリフォルニアセントラルコースト」「ミシシッピキャピタルリバー」を例示した。
- (4) 児童に和紙とペンを配布し、その和紙に似合う色の名前を自分なりに考え記入してもらった。
- (5) 重ね色目について和紙と写真を使った資料を用いて紹介した。
- (6) あらかじめ日本の子どもに名前をつけてもらった和紙と、先ほど児童が名前をつけた和紙をカードに貼り付け、カードの重ね色目の名前を自分なりに考え記入してもらった。
- (7) 完成したカードを鑑賞し合う時間をとった後、色の名前を通してそれぞれの国や時代に生きる自分たち自身のことを考えることができるということをもとめとして伝えた。



3 成果と課題

本題材が色という非常に視覚的な題材であることから、視覚情報によって児童の興味や感動を引き起こすことができるような手作りの教具を多数使った授業に挑戦した。予想通り、配布物・掲示物にかかる時間や混乱は大きかったが、実際の授業で、児童たちから“Beautiful.”と歓声が漏れる場面があり、国籍を越えて「美しい」と思う気持ちや感動は共有できるのだということを実感できた。

出来上がった児童の作品を見てみると、それぞれに児童オリジナルの名前をつけることが出来ていた。その中にはアメリカの子にしかできない、日本の子にしかできないだろう表現もあり、同時にどちらの子どもにも共通するような表現もあった。しかし、それらを児童たち自身に気付かせるところにまで至らなかったことが大きな課題である。授業のねらいを児童に伝えるために自分がどのようなことばを使えば一番児童にうまく伝えることができるのか、ことばの精選ができていなかった。特に児童主体となる活動を指示する場面と、最後のまとめの場面では、ことばに対する自分の準備不足を痛感させられた。

【自己の変容】

アメリカの教育現場を体感して、あらためて、外の世界を見て初めて自分（自国）にないものとあるものが客観的に見えてくるのだと感じた。そしてないものに気づけたからこそ、あるものをいかに有効的に使っていくか・どう生かしていくか考えられるし、ないものを取り入れていくための前向きなアクションが起こせる。今後自分自身が日本の学校教育の枠組みに教師として入ってゆくことを考える時、自分はそこで何が出来るのか、何がしたいのかということについて、今までより広い視野を持って、前向きに考えられるようになったのではないと思う。

また日本だけでなく、どこの国も「子どもを伸ばしたい」という願いは同じで、実際は国によってそのやり方に差があるけれども、本当は国に関係なく、世界中の子どもを世界中のみんなでもより良い方向へ押し上げていこうとしているのだという教育のイメージが自分の中に生まれた。

第4学年 異文化理解 “Let’s study kanji!”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 吉川 修史

1 ねらい

- ① 文字は国・地域の歴史や文化を映し出している。漢字の歴史や象形文字の成り立ち、魚偏の漢字が多い理由などに着目させることで、日本の歴史や文化に目を向けることができるようにする。
- ② 子どもたちが本単元を通して「文字を通して文化・歴史が見える」という見方を獲得することで、他の文字（言語）に目を向けるきっかけになるようにする。

2 概要

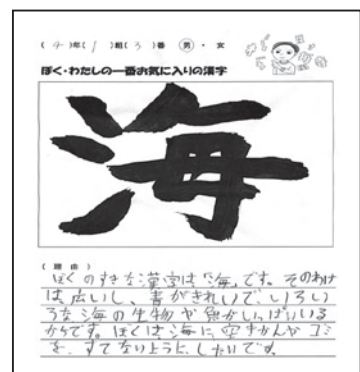
- (1) 日本語には3つの文字があることを紹介した。その後、日本の子どもたちからのメッセージとして「お気に入りの漢字」を紹介した。「海」「家」「笑」「遊」の4つについて文字の意味と、選んだ理由について説明した。
- (2) 漢字を通して日本の歴史や文化、日本の小学校生活の一端を見ることができるよう以下3つのクイズを提示した。
 - ①「日本の小学生はいくつの漢字を学習するのか？」
 - ②「なぜ、漢字はチャイニーズキャラクターと呼ばれているのか？」
 - ③「なぜ、日本には魚を意味する部分（魚偏）を含んだ漢字が多くあるのか？」
- (3) 象形文字である“山”の成り立ちについて解説した後、“口”を描いた絵から漢字を想像する活動や“雨”という漢字からもとになった形をイメージする活動を行った。
- (4) 「友達とどんなことをして遊ぶか?」や「君たちの友達が好きなスポーツって何?」などと質問し、自分にとっての友達を思い描いてもらった後に友達について絵を描いてもらった。そして、その絵をもとにしてオリジナルの漢字を創造してもらった。
- (5) 3人の子どもに、自分が創造したオリジナル漢字を紹介してもらった。そして「友」という漢字に込められた意味について説明した。最後に、「世界にはたくさんの文字があります。漢字だけでなく多くの文字は歴史や文化を含んでいます。他の文字を知ることばあなたたちに多くのものを与えてくれます。私は、将来あなたたちが様々な文字を知ることを願っています。」と伝え授業を終えた。

3 成果と課題

- 「創造」的な活動を取り入れた点。
- 文化伝達でなく文化交流となった点。
- 他の国・地域の歴史や文化を知ろうと思うきっかけとなった点。
- 漢字を通して歴史や文化が見える授業になっていたか、という点。
- 発問の不明確さにより教師の意図する活動にならなかった点。
- 授業の目標と学習活動が乖離していた点。

【自己の変容】

今回のアメリカ訪問を通して、これまで自分自身が大切にしてきた「子どもをさぐる」という言葉を見つめ直すことができた。目の前にいる「この子」に正対してとらえようとする構えは万国共通のものであると感じた。また、国際理解を考える上で次の二点が大切であると感じた。第一は、「人が見える」ということであり、第二は、コミュニケーションを深化させるのは「言葉」であるという点である。今後は、言葉を見つめ、そこに「生きる人」が見える授業とはどのようなものかを探求していきたい。



第5学年 異文化理解 “Let’s study from Japanese sweets!”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 河合彩華

1 ねらい

本時のねらいは、日本の伝統的なお菓子である和菓子を、児童が普段食べているお菓子と比較することを通して理解することである。さらに、2つのお菓子の類似点や相違点を見つける活動を通して「おもてなし」の心は日米共通であることを知ることもねらいとしている。

2 概要

- (1) 自己紹介後、和菓子と洋菓子の写真のカードを2つのグループに分類するゲームを行う。分類の仕方と理由を発表させる。
- (2) ゲームの答え合わせをし、和菓子を紹介する。今日の学習では児童が普段食べているお菓子と和菓子を比較しながら、和菓子を理解していくことを説明する。
- (3) 実際の和菓子を観察させ、気付いたことをシンキングマップに書かせる。色遣いや大きさに着目して観察していた。
- (4) 実際に和菓子を食べ、気付いたことをシンキングマップに書かせる。「美味しい」という児童が多く、「和菓子のほうが甘い」と言う感想もあった。
- (5) 和菓子づくりの映像を流し、1つ1つ丁寧に手作業で作る過程を見せた。
- (6) 「なぜ和菓子職人は1つ1つ丁寧に作っているのだろうか？」と発問する。職人が食べる人を喜ばせようとする「おもてなし」の心について説明する。
- (7) 「『おもてなし』の心は和菓子にだけ含まれているのだろうか？」と発問し、児童に考えさせる。「おもてなし」の心は日米のお菓子どちらにも共通することであると説明する。

3 成果と課題

- 和菓子を食べ、実際に作っている様子を映像で見せるというような活動中心の授業を行ったことで、児童は興味を持って取り組むことができた。
- シンキングマップを使用したことで、児童が自由に気付きを記述でき、それらの気付きがクラスで共有しやすくなった。
- 自分の語彙力不足から、ゲームの説明が十分にできず、児童を混乱させてしまった。また、児童の意見を理解しきれなかった。
- シンキングマップを使用したことで気付きを共有することはできたが、それに満足してしまい、書いた理由など児童の言葉をさらに引きだすことができなかった。
- 「おもてなし」の概念について、児童の意見から引き出すことができず、強引に概念の説明をしてしまった。

【自己の変容】

今回の体験型教育実地研究では、コミュニケーションにおいて大切なことを考えるきっかけができた。私は授業でたどたどしい話し方しかできず、児童の言った意見も全部聞き取ることはできなかった。しかし、お互いに伝えようとする気持ちと聞こうとする気持ちがあったことで授業では児童と私が通じる場面が成立したのではないかと感じた。また、一緒に参加した学生たちが様々な場面で積極的にコミュニケーションをとる姿を見ていても感じた。そのような彼らに刺激され、自分も積極的に話すことに挑戦できた。このように私は、伝えようとする気持ちと聞こうとする気持ちがコミュニケーションでは大切であると考え、このような力を子どもに身につけることが教師にとって重要な課題であると感じた。

第5学年 異文化理解 “Kendo”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 池田大徳

1 ねらい

本授業のねらいは以下の2点とする。

- ①日本固有の競技である剣道に触れることを通して、異文化について理解することができる。
- ②礼儀作法、ルールの意味・よさを考えることで、感謝する態度、相手を思いやる態度を身に付けることができる。

2 概要

- (1) 自己紹介を行い、続いて本時のテーマである「剣道」の説明をした。
- (2) 小さな竹刀で新聞紙を真っ二つに切るというデモンストレーションを行った。まずは授業者が行い、次に子どもたちが行った。
- (3) スポーツ（アメリカンフットボール、野球）の映像に合わせて、応援している観客を演じるように指示した。
- (4) 授業者が剣道の映像に合わせて、応援している観客を演じ、剣道の観客の様子を見せた。
- (5) 剣道の映像に合わせて、応援している観客を演じた授業者の様子と、他のスポーツの観客を演じた自分たちの様子を比較し、異なる点を考えるように指示した。
- (6) 剣道は、なぜ声援による応援が禁止されているのか考えさせた。
- (7) 他にも剣道独特のルール・礼法（競技中ガッツポーズが禁止されている、剣道場への入退場の際には礼を行わなければならない）を紹介し、剣道の根底には相手を思いやる気持ちがあることを伝えた。
- (8) 我々の生活は様々な人によって支えられており、周りの人々を思いやることの大切さを伝えた。
- (9) 最後に授業の感想を書かせ、授業を終了した。



3 成果と課題

本時の成果は、本授業の導入部分が子どもたちの興味・関心を高めるものであったことと考える。日本文化の象徴とも言える「侍」が行っていた剣術が基となった剣道は、現地の子どものたちにとって大変興味深かったようで、竹刀を使ったデモンストレーションでは、設定していた時間に収まりきれないほどの希望者がおり、中には身を乗り出して挙手をする子どももいた。

しかし、授業のまとめが授業者から子どもたちへの一方的なものとなってしまい、子どもたちの思考を止めてしまったことが今回の実践で悔やまれる点である。「相手を思いやる」という概念を子どもたちが自発的に感じることが出来るような手立てが考えられていれば、子どもたちは授業の最後まで思考することが出来ていただろう。

【自己の変容】

筆者の本授業における自己の変容として、本授業のテーマである「他者を思いやる」などの概念的なものをテーマにしたときの授業展開に対する認識の変化が考えられる。ただでさえ、言葉の壁があった中で、そのようなテーマをさらに伝達型の授業展開で進めてしまえば、子どもたちの心に響くことはないだろう。本授業は、改めて「子ども主体」の授業展開の重要性を認識する機会となった。

今後、海外の子どもたちを対象に授業を行う機会があるかどうか分からないが、機会さえあれば、ぜひまた授業を行いたい。

第5学年 異文化理解 “Original Box Lunch”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 永 杉 茂 仁

1 ねらい

本授業では、日本の弁当、特に最近の子どもたちに人気のあるキャラクター弁当を教材として取り上げ、食事について考えるきっかけとすることをねらいとした。現在、日本食は健康的なイメージを集め、世界中で人気となってきている。アメリカでも健康的な食事に関心が高まっていることから、自分自身の食事を考え、食材の品目や量などを考えた栄養バランスの良い弁当をデザインすることもねらいとしている。

2 概要

- (1) 自己紹介を行い、まるで弁当に見えないキャラクター弁当の写真を用いて「これは何か」という簡単なクイズを行った。
- (2) 広島大学付属三原幼稚園の実際に幼児たちが食べているキャラクター弁当の写真を見てアメリカの子どもたちに幼児や弁当に関するコメントを書いてもらった。
- (3) 日本の弁当文化について写真を見ながら「栄養バランスが良くできる」「きれいに詰められており見た目も美しく食事が楽しくなる」「自分に合った弁当を作ることができる」の三点を中心に紹介した。



- (4) 4種類の弁当の写真を載せたプリントを用意し、「Choose My Plate」という食品バランスを考える図表をもとに、写真の弁当にどんな食材が足りないかを考えさせた。
- (5) 子どもたち自身に自分の食べてみたい弁当をデザインさせた。その際、その前の活動で行った「Choose My Plate」を意識させ、栄養バランスの良い健康的な弁当を作るように説明を行った。

3 成果と課題

授業の計画は、食べ物や日本のキャラクターに興味をもってくれたため積極的に参加することができるような題材を扱うことができたと感じている。しかし、授業内容を詰め込み過ぎたため予定していた時間を超過してしまったことが課題である。想定が甘かったことと子どもたちの様子を見て瞬時に判断を変えることのできる力が自分には不十分であると感じた。

内容に関しては、概ね授業の意図を理解しているようで、アメリカの児童の自由な発想を引き出すことができた。担任の先生と机間指導の際にコミュニケーションを取って、子どもたちの状況を把握することができたことが良かったのではないかと考えられる。改善すべき点は、もう少しアメリカの文化にも触れ、アメリカの児童が自分たちの文化を見つめ直すきっかけを作ればよかったのではないかと考える。

【自己の変容】

アメリカの人たちに日本の文化を伝えるということで、なかなか理解できないことがあったかもしれないが、中でも「伝えようとする気持ち」の重要性を改めて感じた。言葉だけでは伝わりにくいからこそいろいろな方法を用いて伝えることで、互いに価値観を理解していく感覚がとても新鮮だった。

また、国が変わっても子どもたちの「学ぼう、知りたい」という姿勢は変わらず、将来教師として子どもたちに関わっていきたくて考えているが、この意欲を失わせないようにしなければと改めて感じた。

今後海外の方とかかわる機会がどれほどあるかわからないが、この体験型海外実地研究での経験を無駄にせず、英語力や海外の方とのつながりを大切にしていきたい。

第6学年 異文化理解「Your familiar thing changes into Japanese Monster !?」

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 黒川 麻実

1 ねらい

本授業では、日本の伝統的な民族的信仰文化の一つである「妖怪」や「付喪神」について理解や知識を深め、また身近な物を使用し、自分達で「付喪神」を作り上げる。日本の「妖怪」について知ることで、込められた昔の人々の教訓や願いについて学び、また日米の民族的信仰文化の違いや共通点について気づかせていくというねらいがある。その上で、「妖怪」の一種である「付喪神」を自分たちの身近な物などで想像し作成することによって、「付喪神」に込められた「物を大切に扱う」という教訓を体験的に学ぶと共に自分たちの生活でも実践できるようになることを目的としている。

2 概要

- (1) 河童の恰好（コスプレ）をすることにより、河童の概観や、現代に引き継がれる妖怪がアニメや漫画などに引き継がれていることを説明し、本授業の内容に興味を持たせ、本授業の概要を掴ませた。
- (2) 河童を妖怪の一事例に、妖怪の歴史や種類、民族的信仰文化としての側面を、写真を交えながら説明した。質問も多く出て興味津々の様子だった。
- (3) 妖怪の一種である付喪神について、これらの妖怪の原型は何か、付喪神は道具の妖怪であること、物を大切にしないと身近な物が妖怪化するという昔の人々の教訓について、ワークシートを用いディスカッションをした。妖怪の原型についてはクイズ形式で楽しく回答できていた。
- (4) ディズニーにおける「魔法の箒」等のキャラクターと付喪神との違いについて考え、付喪神は粗末に扱われた道具が「化ける」で出来るという「魔法」とは少し違うということを知った。
- (5) 持参した目玉や口や耳などのパーツと接着テープを使用しながら実際に付喪神を教室の中の物を使って想像し作成した。活動には非常に意欲的で「先生、見て見て！」「まだ作っていい？」など非常に楽しそうな様子であった。また、付喪神の性格や、粗末に扱われた時の行動についても一緒に考案させた。
- (6) 作った付喪神について教室の中で発表し合い、付喪神の持つ教訓について再度確認した。



3 成果と課題

- クイズや話し合い、付喪神作りなどの多様な活動を盛り込むことによって生徒が積極的に授業に参加することができ、また体験的に妖怪について学ぶことが出来ていた。
- 写真や具体物を示すことによって、無形概念である妖怪のイメージをわかりやすく生徒たちに持たせることができた。
- 事前にパワーポイントが作動しなかったり、活動に時間がかかったりと、時間配分の想定が甘く、最後のまとめに時間を割くことがあまりできなかった。
- 生徒の意見に対し自身の語彙力不足により適切な対応が取れなかったり意思疎通に時間がかかった。

【自己の変容】

日本固有の文化である「妖怪」について、どのように授業で伝えるのかについて、授業構想に苦勞した分、現地で実際に授業をし、生徒が興味を持ち楽しそうに活動をしてくれたことが非常に大きな達成感につながった。事前準備の大切さや授業中のトラブルにも柔軟な視点を持って対応することの重要性を、身をもって実感することができた。言語も文化も異なる土地でのこのような授業経験は自身の実践的力量的の向上、自分の指導改善に大きく繋がる。この経験を生かし今後の研究活動に励みたい。

第6学年 異文化理解「What is “MOTTAINAI”？」

教育学研究科 科学文化教育学専攻 社会認識教育学専修 加納 大地

1 ねらい

本授業のねらいは、「もったいない」という日本人の考え方を理解することで、日本文化への理解を深めるとともに、その考え方に沿って自らの日常生活を見つめ直してみることで、表面的な理解に留まらず自らに反映できるものとして、日本人の考え方をアメリカの子供たちが理解することである。

2 概要

- (1) 絵を交えて自己紹介を行った後、風呂敷の使い方やなぜ風呂敷が使われるのかといった点を、実演を交えて説明し、風呂敷には日本の「もったいない」という考え方が込められているのだということを伝えた。
- (2) 「もったいない」とは普段何気なく感じている感情を言い表した言葉だと説明したうえで、いくつかのシチュエーションを描いたイラストを、もったいないという感情を喚起する場面として提示した。そして自分がもしこの場面に遭遇したらどのような感情を抱くだろうかと尋ねた。生徒からは幅広い意見が積極的に寄せられた。
- (3) いくつかの意見を聞いた後、生徒から出た「悲しい」「残念だ」といった意見を取り上げた。そして、なぜそういった感情が湧いてくるのだろうかと問いかけ、それは「大切なものを失ってしまったこと」に対する感情なのだを説明した。さらに、なぜ大切なものを失うとそのような感情になるのだろうかと問いかけ、「あるものを大切に思うのは、人の思いや努力がそこに詰まっているからであり、ものを失うというのはそんな思いや努力をも失ってしまうことになるからだ」と説明し、「もったいない」はこのような考え方が込められた言葉であることを伝えた。
- (4) どんな物事をもったいないと思うだろうかと問いかけ、それをワークシートに描いてもらった。集中して描きこんでいる生徒もいる一方、何を描けばいいのか分からない様子の生徒もおり、個別に質問を受けたり指導を行った。

3 成果と課題

- 活動について理解できていない生徒や、活動に消極的な生徒に対して助言を行い、活動を促すことができた。
- 真剣に授業者の話を聞いている生徒が多く、伝えたかったことの一部を正確に理解し、絵に表現できている生徒が見られた。
- 説明や指示を、正確に伝えることができなかった。その結果、内容理解が正確なものとならなかったり、活動をスムーズに進めることができなかった。
- 生徒の発言を正確に聞き取れないことが多く、明確な返答をすることができなかった。
- 難解な概念を伝達する術が不足していた。口頭での説明が中心になってしまったが、説明に頼らずとも具体的な教材や活動を通じて概念が理解できるように授業構成上の工夫が求められたのではないと思う。

【自己の変容】

今回の授業実践を通じて、授業において教材として何を用いるか、そしてどのように用いるかがいかに重要であるかを実感した。英語で授業を行う中で、口頭での説明、文章での説明だけで伝えたいことを理解させることの難しさを痛感した。これは日本人に対して授業を行う場合でも同様であると思う。ある教育内容を扱う上で、説明に頼ることなく、いかなる具体物や活動を通じてそれを理解させるか。このような教材選び、授業構成能力は教師に求められる重要な力量の一つであるという思いを強くした。

第8学年 異文化理解 “Let’s make your original “HANKO”!”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム専修 横山 愛

1 ねらい

日本では判子を押すという場面はよく見られることだが、アメリカにはない文化である。そのためアメリカでは珍しい判子を紹介し、実際に作ってみることで少しでも日本の文化に触れることができるのではないかと考えた。また、判子の代わりにアメリカではサインが使われている。日本の文化に触れることで改めて自国の文化やサインの役割などにも目を向けることができると考え、本単元を設定した。

2 概要

まず簡単に自己紹介とあいさつをした。判子を使う具体的な例をパワーポイントで示しながら判子について説明した。判子は何かを証明するという役割をもち、時には自分自身を証明するものになるということを説明した。

次にオリジナル判子の作成を行った。判子の作り方の説明をし、デザインの例を示し、作るために必要な材料を配布した。それぞれが好きなデザインを紙に書き、それを発砲トレーに写し、油性ペンでなぞり、朱肉につけて押し、自分の作ったオリジナルの判子を子ども同士で共有させた。

3 成果と課題

本授業で得られた成果と課題は以下の通りである。

成果について述べる。子ども達にとっては珍しいと思われる判子について紹介することができ、判子に対して興味・関心を持ってもらえたと思う。判子作りは楽しんでいる様子が観察でき、「ハンコ」と片言ながらも言ってくれる子どもも何人かいた。次に子ども達が工夫を凝らしたデザインをしていたことである。自分の好きなマークやキャラクターと自分の名前を上手く組み合わせたデザインを考えている子が多かった。そして、子どもとのコミュニケーションをとることができたことは大きな成果であったと思う。多くの子ども達は自分の作った判子を嬉しそうに見せてくれたので、たくさんほめたり、話を聞いたりすることができたと思う。

次に課題について述べる。まず、パワーポイントが上手く起動しなかったことや緊張していたこともあって、初めの方の説明がうまくいかなかったことである。次に判子の役割についてもっと広げられなかったことである。急遽時間を削り、説明を短くしたことによって判子の役割についてはあまり広げられることができなかった。判子を一方的に紹介するよりも、サインと比較しながら説明し、判子やサインの役割について考えさせる授業展開を行う必要があったように思う。最後に、作品として完成させられなかったことである。本単元では自分の書いた書道であると証明するために、書道の作品に自分の作った判子を押して完成することを目的としていた。しかし、時間がなくなってしまい、この目的を達成することができなかった。適切な時間配分を意識しながら授業をすることができなかったことは大きな反省点である。

【自己の変容】

英語を使ったコミュニケーションでは文法や発音が多少違っていても、理解しようとしてくれて、英語でのコミュニケーションがすごく楽しいことだと感じられた。今までは文法などの細かい間違いを恐れて英語を使うことを躊躇してしまいがちだった。もちろん正確さはとても大事なことで、指導する立場としては正しい英語を身につけるべきだが、コミュニケーションをとろうとする態度がとても重要なことだと強く感じた。

この体験を通してアメリカだけでなく他の外国に対する興味が高まり、たくさんの異文化に触れてみたいと感じるようになった。

第8学年 異文化理解 “Put your heart into the character! ~SHODO spirits~”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 岡田 光 未

1 ねらい

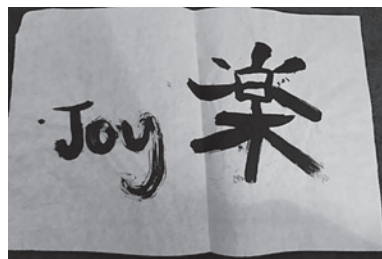
本授業の主なねらいは、気持ちを込めて文字を書くことで、より心のこもった伝わる文字や文章が書けることについて考えてもらい、書くことについて新しい見方を持ってもらうことである。書道は精神を集中させ、落ち着いた心持ちで字と向き合う姿勢が求められる。また書道のように文字に気持ちを込めるといふ文化は日本独特のものではないかと考えたため、このねらいを設定した。

2 概要

- (1) 書道とは何かについての説明を行った。実際に筆で書いたものを見せると興味を持ってくれたようだった。この時、「文字に気持ちを込めること」「集中して取り組むこと」の2点を強調して伝えた。
- (2) 道具と手本を配布して、16種類の漢字の手本から好きな意味の漢字を選ぶように指示した。
- (3) 実際に筆と墨を用いて、半紙に漢字を書く活動を行った。慣れない感覚で戸惑いつつも、楽しんで書いていたようだった。

3 成果と課題

○書道という教材については子どもたちの興味・関心を惹きつける適切なものであったと思う。「書く」ことは彼らも普段から行っていることであるので、同じ「書く」ことに関する異なる文化に触れることは、普段の自分に還元しやすいというメリットがあったと考える。また、教具の準備もかなり配慮をしたため、自分としては最大限無駄を省き、視覚的な補助も入れるなど、伝わりやすい内容にはなっていたのではないと思う。



●自分では様々な場面の英語をできるだけ想定して挑んだつもりであったが、まだまだ細かい指示についての英語が準備不足で、意図をうまく伝えることができなかった。また、指示などを大幅にカットして、最低限のことを伝えたところ、日本では考えられないであろう行動がいくつか見られ、文化の違いへの考慮も不十分であったことが分かった。さらに、今回の授業では目標として挙げていたことがほとんど達成できなかった。授業ごとに生徒が移動する仕組みの学校であったため、生徒たちは次の授業の時間をしきりに気にしており、多くの子は活動に集中できていなかったと考えられる。また、清書をしていないため、気持ちを込めるといふ経験をできた生徒もほとんどいなかったのではないと思われる。最後の片づけにおいても全部を指示する間がなく、書いたものを捨てて急いで教室移動してしまう生徒が大半を占め、自分としてはかなりのショックを受けた。今回の授業の目標を達成するためには、まず何よりも物理的・精神的余裕を保障することが大切だったのだと思う。

【自己の変容】

母国語以外の言語のみでコミュニケーションをとるといふ機会に初めて触れ、多言語を学び、使えるようになることの大切さを改めて感じた。また、コミュニケーション能力とは、言語力と伝えようとする意欲の和であると気付かされた。いくら言語力に優れていても、意欲がなければ伝わらない。意欲があっても、やはり言語力がないと多くは伝えられない。両方が作用して初めてコミュニケーションが成り立つのだと実感した。さらに、コミュニケーションは相手の聞く意欲・態度があってこそ成立するものだという事も強く感じた。これは単に国際交流の場面のみならず、日常の場面でも大いに当てはまることだと思う。日常生活においては、ネイティブの言語を用いているため、往々にして既に持っている言語力に頼りがちなのだと思う。本当に伝え、聞く意欲はあるのか。用いている言葉の選択は適切なのか。普段の自分のコミュニケーションについて考えさせられる機会となった。

第8学年 異文化理解 “Think Global, Act Local”

教育学研究科 学習科学専攻 学習開発基礎専修 藤井 瞳

1 ねらい

本授業のねらいは、生徒にとって身近であるだろうマクドナルドが、日本をはじめとした世界各国に広がり独自のメニュー展開をしていることに気づくことを通して、経営理念である“Think Global, Act Local”を理解し、グローバルゼーションについて知ることである。実際に地元ノースカロライナのメニュー作りを行うことによって“Think Global, Act Local”を実践することもねらいとしている。

2 概要

- (1) 自己紹介の最後に好きな食べ物屋さんの外観（日本のマクドナルドの都市型店舗）をパワーポイントで提示した。ヒントとして、隠しておいたゴールデンアーチとドナルドを見せるとすぐにマクドナルドであることに気づけた。
- (2) 「マクドナルドクイズ」と称し、全世界の店舗数や、店舗の多い国ランキングなどを三択で出題した。その後、「イタリア」「日本」「インド」のうちどの国のメニューなのかを自作したメニュー表から考えさせた。
- (3) McDonald's philosophy として “Think Global, Act Local and Sell like a Retailer” を提示し、なぜ国によってメニューが異なっているのかについて説明した。
- (4) 地元ノースカロライナのメニューを作ることを説明し、ワークシートにメニュー名とイラスト、紹介文を記入させた。（ワークシートは回収し、翌日返却した）
- (5) 最後に授業者の思う国際交流で大切なこととして「自分たちの文化に誇りを持つこと・他の人の文化を理解すること・お互いの文化を受け入れること」という三点を伝えた。

3 成果と課題

- マクドナルドの店舗の外観はパワーポイントで、メニューはカラー印刷したものを一人一枚配布するといった、視覚的に訴える提示方法を目的によって使い分けることができた。
- 電子辞書や筆談、ジェスチャーなどを使って子どもからの質問に何とか答えることができた。
- ほぼ全員の子どもが、ノースカロライナのオリジナルメニューとして、地元の特産品などを使ったハンバーガーやドリンク、デザートを考えられた。
- 授業規律を保つことができず、教頭先生や担任の先生が何度も子どもたちを注意していた。原因として、指示が伝わっていなかったこと、作業が終わった子に対する指示が足りなかったこと、私語なのか相談なのかの判別がつかなかったことがあげられる。
- 回収したワークシートに対して、具体的なコメントをして返却することができなかった。
- 最後のまとめとして「異文化交流の大切なこと」と提示したが流れにあっていなかった。“Think Global, Act Local”として提示すれば統一性があつたのではないかと思う。

【自己の変容】

今回、アメリカで異文化理解の授業を行うにあたって、アメリカの子どもたちに日本の文化を伝えるのではなく、アメリカの文化が日本でどのように受け入れられているのかといった視点からアメリカと日本の関係を考えられないかと思い、マクドナルドを題材とすることにした。アメリカの子どもにマクドナルドを題材とした授業を行うことは不安もあったが、挑戦してよかったと思う。

「異文化交流において大切なことは何か」という問いに対し、授業作りを通して「自分の文化に誇りを持ち、相手の文化を理解し受け入れること」という一つの考えにたどり着いた。他国だけではなく、日本の文化や歴史についてもっと理解を深め、誇りをもって世界に発信できるようになりたい。

4 本年度の授業の整理と考察

(1) 本年度の授業

2013年度体験型海外教育実地研究（米国ノースカロライナ州）において実施された授業は、次の通りである。

表1 実施授業の学年と教科等

授業	学年	教科等，題材・テーマ*
A	幼	異文化理解 A Wish in TANABATA
B	2	音楽科 Let's sing WARABEUTA together!
C	2	異文化理解 Let's make a decoration of the Halloween with origami!
D	3	異文化理解 Let's play the Japanese MENKO game
E	4	異文化理解 Let's hold "Yuru-chara" contest in Greenville!
F	4	異文化理解 Names of Traditional Colors ~ My color, Our colors
G	4	異文化理解 Let's study kanji!
H	5	異文化理解 Let's study from Japanese sweets!
I	5	異文化理解 Kendo
J	5	異文化理解 Original Box Lunch
K	6	異文化理解 Your familiar thing changes into Japanese Monster!?
L	6	異文化理解 What is "MOTTAINAI"?
M	8	異文化理解 Let's make your original HANKO
N	8	異文化理解 Put your heart into the character! ~ SHODO spirits ~
O	8	異文化理解 Think Global, Act Local

*「教科等，題材・テーマ」は、参加者（授業者）が付したものであり、授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものである。

(2) 事前の取り組み

参加者は、日本での事前学習会において、授業の目標、内容、教材、学習過程などについて相互に協議・検討し、具体的な準備を進めた。また、英文の指導案を作成し、7月に実施した授業研究ワークショップにおいて、イーストカロライナ大学教育学部のウォーレン先生、イクスプロリス中学校長のサマー先生、ウォールコート小学校のマックスウェル先生、タイラー先生から、教材構成についての助言や児童生徒の実態に基づく助言をいただき、指導計画の改善を図った。その際、授業実施学年については、参加者の希望と指導内容を考慮して決定した。さらに、現地では受け入れ校の関係教員と事前の打ち合わせ会を行った上で授業に臨んだ。

(3) 授業についての考察

本年度の授業について、主な成果と課題を以下に整理して示す。

① 成果

ア. 教材開発

参加者は、各自の問題意識や専門領域の特性を生かし、七夕、わらべうた、折り紙、メンコ、ゆるキャラ、伝統色・重ね色目、漢字、和菓子、剣道、キャラクター弁当、妖怪、風呂敷、判子、書道、マクドナルドを素材として、新教材の開発を行った。開発された教材を、異文化理解に資する機能を視点として見ると、以下のように分類・整理することができる。（括弧内の記号は、表1の授業A～Oとの対応を示している。）

- ・日本の伝統文化や現代文化についての理解を促す教材（A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, O）
- ・日米さらには諸外国の文化の比較を促す教材（H, I, K, M, O）
- ・日米の児童生徒の願いやものの見方・考え方の比較・交流を促す教材（A, C, F, G）
- ・既成の文化をもとにして、児童生徒の創造的・主体的な思考・表現活動を引き出す教材（B, E, F, G, J, K, L, M, O）

既存の教材の解釈ではなく、自ら教材を考案・構成した経験は、参加者の教材開発力の育成に資するものであると考える。

イ. 指導の構想の明確化

日本国内での事前の学習会における指導案検討やワークショップにおける米国の先生方からの助

言をもとに、参加者は、授業実施の対象となる児童生徒の発達段階、文化的背景、自己の言語能力、授業時間等を考慮して、授業の目標、内容、方法を焦点化・明確化している。授業の目標、内容、方法の焦点化・明確化は、授業構成の基盤となるものであり、参加者の実践的指導力の向上に資するものであると考える。

ウ. 教材提示ならびに学習活動の工夫

参加者は、授業の構成・展開において、現実の事物事象の提示、ICTを活用した視覚情報・聴覚情報の提供、実体験や疑似体験を重視した学習活動の設定、オープンエンドの学習活動の設定、遊びの要素を取り入れた学習活動の設定等、多くの工夫を施している。これらの工夫が、日本の文化に対する興味・関心の喚起、日本の文化についての実感を伴う理解、日米の文化についての比較を通じた理解、多様で創造的な思考・表現を可能にしている。このような授業の構成・展開の工夫の多くは、参加者の言語（英語）による表現を補うための工夫として考案され、取り入れられたものであるが、日本における授業においても、児童生徒の学習内容の理解を一層深めるための有効な手だてとなるものであり、参加者の実践的指導力の向上に資するものであると考える。

② 課題

前章に掲げた参加者の報告書の記述内容から、指導者として伝えなかったことがうまく伝えられなかったと感じている参加者も多いことがわかる。

本時の目標に到達した児童生徒の姿は具体的にどのようなものであるのか（評価規準）を一層明確にした上で、期待する児童生徒の思考・表現を引き出すための指導内容・方法を吟味検討する必要がある。

(4) 参加者の「自己の変容」についての考察

前章に掲げた参加者による「自己の変容」の記述内容を分類・整理すると、以下の3点にまとめられる。

- ① 子ども・教育に対する認識の変容
- ② コミュニケーションに対する認識の変容
- ③ 授業に対する認識の変容

以下に、それぞれの具体的な記述（全参加者の記述について一部分を抜粋。なお、表記は一部変更した。）を示す。

① 子ども・教育に対する認識の変容

・どこの国も「子どもを伸ばしたい」という願いは同じで、(中略)、世界中の子どもを世界中のみんなでより良い方向へ押し上げていこうとしているのだという教育のイメージが自分の中に生まれた。

・目の前にいる「この子」に正対してとらえようとする構えは万国共通のものであると感じた。
 ・子どもたちの「学ぼう、知りたい」という姿勢は変わらず、(中略)、この意欲を失わせないようにしなければと改めて感じた。

② コミュニケーションに対する認識の変容

・伝えようとする気持ちと聞こうとする気持ちがかommunicationでは大切であると考え、このような力を子どもに身につけることが教師にとって重要な課題であると感じた。

・言葉だけでは伝わりにくいからこそいろいろな方法を用いて伝えることで、互いに価値観を理解していく感覚がとても新鮮だった。

・英語を使ったコミュニケーションでは文法や発音が多少違っていても、理解しようとしてくれて、英語でのコミュニケーションがすごく楽しいことだと感じられた。

・多言語を学び、使えるようになることの大切さを改めて感じた。また、コミュニケーション能力とは、言語力と伝えようとする意欲の和であると気付かされた。

・これから日本の子どもたちと関わっていく際にも、どうしたら伝えられるのか、どうすれば理解してもらえるのか、世界中の誰にでも伝えられるように、という視点をもって考えていきたい。

・「異文化交流において大切なことは何か」という問いに対し、(中略)、「自分の文化に誇りをもち、相手の文化を理解し受け入れること」という一つの考えにたどり着いた。

③ 授業に対する認識の変容

・言葉の壁があった中で、そのようなテーマ（「他者を思いやる」）を伝達型の授業展開で進めていっては、子どもたちの心には響くことはないだろう。本授業は、改めて「子ども主体」の授業展開の重要性を認識する機会となった。

・事前準備の大切さや授業中のトラブルにも柔軟な視点をもって対応することの重要性を、身をもって実感することができた。

・説明に頼ることなく、いかなる具体物や活動を

通じてそれを理解させるか。このような教材選
び、授業構成能力は、教師に求められる重要な
力量の一つであると強く感じた。

- ・ 授業を創造していく中で、授業計画は簡潔明瞭
に、教材は分かりやすく発達段階に適したもの
などの大切さを痛感することができた。
- ・ 視覚や聴覚といった五感に効果的に作用する教
材・教具を用いること、分かりやすく明快な言
葉で指示や質問をすること、ボディランゲー
ジやアイコンタクトを大切にすることなどの重
要性を痛感しつつ、実際にそれらを大切にしま
ながら授業実践することができた。
- ・ 躰くであろう過程への手立てが欠けていたよう
に思う。このような手立てが必要なのはアメリ
カに限ったことではない。日本でも同様である。
アメリカで授業することで改めて授業準備の重
要性を感じさせられた。
- ・ 指導者が伝えたいことと学習者が学びたいこと
の間にはズレがあり、またそのズレを小さくし
たり、学習者にズレだと感じさせないようにし
たりすることが大切だと感じるようになった。

これらの参加者一人一人の「自己の変容」の記述
は、本実地研究が目標の一つとする「グローバル・
パートナーシップを推進するために必要な資質の育
成」の実現を具体的に示すものであると考える。

5 おわりに

教育学研究科大学院生によるアメリカの小中
学における体験型海外教育実地研究は、今回で7
年目を迎えた。今年度は昨年以上の参加希望
者があり、幅広いテーマで受講者の個性の表れた
授業内容および指導法が見られた。アメリカ合衆
国という、ことばも文化も異なる環境で、達成さ
れた成果で述べられたように、①子ども・教育に
対する認識、②コミュニケーションに対する認
識、③授業に対する認識、において大きな価値の
ある変容を認めることができた。

「はじめに」で述べられたように、このプロ
グラムにおいて期待されるのは、日本の学生たちが
慣れ親しんだ状況を離れて、アメリカの児童・生
徒の理解に基づく教材や指導方法の開発を行うこ
と、日米双方の学校教育場面を体験することを通
して、両文化の相互理解を図るための教材開発能
力を涵養すること、さらには両国間のフレンド

シップを越えて、学校間のグローバル・パート
ナーシップ推進のためのプログラム開発を実施、評価
できる人材を育成すること、の3点にあった。

最後に、各校での実習授業を観察して、あるい
は引率教員との情報交換を通して、今年度のプロ
グラムで上記のような目標が達成されたか振り返
り、来年への課題を指摘したい。

① 他者の視点から教材を見る視点を養うこと

人、もの、情報の交流によって、もはや完全に
未知の異文化事象は少なくなってきたが、教材開
発の際に、どうしてもエキゾチックな日本紹介を
行う希望があり、文化間のギャップを埋めること
が大きな課題になることがあった。日本のことを
説明すると同時に、アメリカにおいて子どもたち
が学校や社会で体験することで類似しているもの
はないか、を常に意識しながら、教材の開発、発
展に活かしていきたい。

② コミュニケーションへの関心・意欲・態度

今回は参加者が多かったこともあり、集団行動
の中でどうしても班内での発言者が限られること
が見られた。英語という壁はあるが、自らが意見
や感想を述べようとする、自発的コミュニケーション
への態度をさらに高めたい。現地教員との
交流場面で、もっと積極的に交流に参加しようと
する態度が望ましい。

③ 教室内相互作用モデルの学習

今回は与えられた時間と場所で、自らの授業実
践に大きな時間と努力をかけたが、アメリカ人教
師たちは各校種でどのような授業実践を行ってい
るのか、どのように生徒との交互作用を引き出し
ているか、をさらによく観察するように期待した
い。教師と児童・生徒のとのコミュニケーション
場面において、教科内容の選択・配列だけでなく、
それを効率的に子どもたちに伝えようとするこ
とが求められる。これからのグローバル化教育に関
わる未来の教師にとってまたとない機会となっ
た。さらに多様な子ども集団とどのように向き合
うかについて、現地の教員の助言を受けながら、
近未来の日本の教育の姿を予見できるようになる
貴重な機会として、今後ともこのプログラムをさ
らに発展させていきたい。

〔参考文献〕

小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大

大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻, 2007, pp.43-56.

小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅱ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻, 2008, pp.39-53.

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅲ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻, 2010, pp.95-104.

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中

校での体験型海外教育実地研究Ⅳ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻, 2011, pp.155-168.

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校における体験型海外教育実地研究Ⅴ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻, 2012, pp.129-140.

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校における体験型海外教育実地研究Ⅵ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第19巻, 2013, pp.259-269.